

宮本地車噺



第14回「神々の活躍～日本神話～ その二」

前号から続き) 父イザナギの怒りにより追放されてしまったスサノオは母の元に行く前に姉のアマテラスが治める高天原^{たかまがはら}へと寄ることにしました。高天原でのスサノオは粗暴で、田の畔を壊して溝を埋めたり、御殿に糞を撒き散らしたりしました。他の神々がアマテラスに苦情を言いましたが姉のアマテラスは「考えがあつてのことなのです。」と弟をかばっていました。

アマテラスが機屋で神に捧げる衣を織っていた時の出来事です。スサノオは機屋の屋根に穴を開け、そこから皮を剥いだ馬を落とし入れました。この時一人の服織女が驚き、梭^ひ(機織の横糸を巻いた舟形の糸巻き)が体に刺さり死んでしまいます。これには怒ったアマテラスは天乃巖戸^{あしはらのなかつくに}に引きこもってしまいます。太陽の神が居なくなったことにより高天原と葦原中国(日本の国土のこと)は闇に包まれ様々な災いが起こるようになりました。

八百万の神々は天安河原にあつまりどうするべきかを相談しました。そこでアメノウズメが伏せた桶の上で踊り出すとあまりの可笑しさに八百万の神々が一斉に笑い出しました。何事だろうとアマテラスが巖戸を少し開けたところを隠れていたタヂカラオが巖戸を開きオアマテラスに出てきて頂くことに成功しました。これにより天地は光を取り戻しました。



アメノウズメ、表情が可愛い

この件を重く受け止めた八百万の神々はスサノオを葦原中国へと追放することにしました。スサノオは青草の蓑笠を着て村々をさすらい辛い日々を送っておりました。スサノオが出雲の肥河の川上に着いたとき、泣き悲しむアシナヅチ、テナヅチの老夫婦と一人の娘に出会います。この娘が櫛稲田姫です。スサノオが泣いている訳を尋ねたところ、毎年大蛇がやってきて娘を一人ずつ喰ってゆく。今日また八番目の娘である櫛稲田姫が喰われてしまうということでした。そこでスサノオはこの大蛇を退治することとなりました。



大屋根正面小屋虹梁「櫛稲田姫」と島根県松江市八重垣神社の櫛稲田姫の壁画

さて、この夫婦の名前ですが「足撫づち」「手撫づち」といい足を撫でる、手を撫でるという意味があると言われます。つまり櫛稲田姫は夫婦に撫でるように大切に育てられた娘ということです。撫でるように育てられた子、「大和撫子」の語源と言われています。

さて、今回はこの撫子を守るためスサノオが大蛇と戦います。